

もり ぞの
森 園 遺 跡 2

大野城市教育委員会

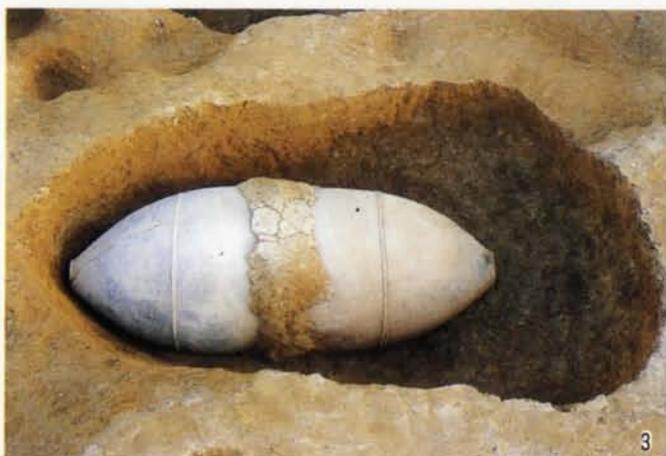


解説シート「森園遺跡1」では、九州電力の変電所内で確認された、弥生時代と古墳時代の集落（しゅうらく 竪穴住居跡）を取り上げました。変電所の外側では、合計59基の土坑墓・甕棺墓・石棺墓などからなる弥生時代の墓地が確認されました。遺跡のあった土地は後の時代に大きく削られていますので、本来はこれよりもっと多くの墓があったに違いありません。

1は墓地全体の一部を写したものです。森園遺跡は弥生時代にどのような墓が作られ、時期ごとにどのように移り変わっていったかを知る上で、たいへん貴重な遺跡の一つでした。

2は土坑墓どこうぼです。土坑とは地面に掘られた穴のことで、土坑墓とは地面に掘った穴を遺体を入れる棺ひつぎとして使った墓のことです。まず、大きな穴を掘り、さらにその中に細長い穴が掘られています。遺体はこの細長い穴の中に埋葬まいそうされます。最初に掘っていた大きな穴との間に段が付きませんが、ここに木の蓋かたでおおいをして、後に土をかぶせたと考えられます。





3は甕棺墓です。長さ1m近くもあるとても大きな甕を2つ合わせて棺としています。甕と甕の合わせ目には、水などが入らないように粘土でびっしりと目張り^{めばり}がしてあります。この甕棺は大人を埋葬するために特別に作られたものです。大野城市を始めとする弥生時代の九州北部では、大型の甕を棺に用いる風習がありましたが、これはこの地域だけに見られる特別な埋葬方法です。この甕棺墓は今から約2000年前のもので、完全な状態で掘り出されましたが、中には何も残っていませんでした。



4は小型の甕棺墓で、子どもを埋葬したものです。子どもの埋葬には、特別に棺は作られず、日頃一般に使っていた土器がそのまま用いられています。この甕棺墓にはつぼ^{つぼ}と甕が利用されています。右上に見える甕棺墓も、子どもを埋葬したものです。

5と6は石棺墓^{せつかんぼ}です。文字どおり石を使って棺とした墓ですが、蓋と壁だけに石が用いられ、底には石は使われていません。5は蓋石^{ふたいし}が現れたところです。3枚の平たい石を蓋^{すき}にしています。蓋の隙間^まは粘土や小さめの石を使ってふさいであります。6は蓋を取りはずしたところです。この石棺墓は、おもしろいことに壁全体には石が使われていませんでした。死者の埋葬に当たって、石の用意が間に合わなかったのでしょうか。石棺の中には何も残っていませんでした。もう一度、表の土坑墓^{おもて}の写真(2)を見て下さい。蓋と壁に石が使われていること以外は、土坑墓も石棺墓も作りの上ではたいした変わりがないことがわかるかと思ひます。

